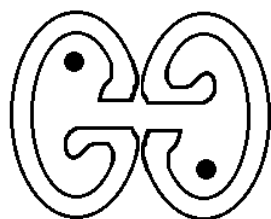


日本双生児研究学会ニュースレター



《第46号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2009年12月発行

目次

日本双生児研究学会第27回研究会講演記録	
「児童・思春期の抑うつ傾向の遺伝と環境 - 双生児法による検討 - 」	
田中麻未 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)	2
日本双生児研究学会第24回学術講演会のご案内	7
お願いと編集後記	10

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00910-2-253840)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

<事務局の住所等が変わりました。ご注意ください。>

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

TEL & FAX : 06-6879-2550

日本双生児研究学会事務局(早川和生)

E-mail : hayakawa@sahs.med.osaka-u.ac.jp

◆◆◆◆◆ 当学会のホームページが引っ越ししました ◆◆◆◆◆

事務局の移転に伴い、日本双生児研究学会の公式ウェブサイトも大阪大学保健学科のサーバー内に置かれてリニューアルしました。

新 URL : <http://sahsweb.med.osaka-u.ac.jp/~jsts/index.html>

「児童・思春期の抑うつ傾向の遺伝と環境 - 双生児法による検討 - 」

田中麻未（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）

I. 問 題

近年、大人と同じ抑うつ症状を示す「子どもの存在」が注目されてきている。これまでの諸外国の疫学的研究によると、一般人口における子どものうつ病は、児童期では 0.5~2.5%，青年期（思春期）では 2.0~8.0%にのぼることが報告されている（Harrington et al., 1994）。ようやく我が国でも子ども版のスクリーニング尺度の開発が進められるようになり、いくつかの代表的な尺度の日本語版を使用して、大規模な調査がなされてきている。例えば、傳田ら（2004）による日本の 3,000 人以上の小・中学生を対象に行われた調査では、対象者の平均得点が欧米の調査結果と比べても高い値であったことが報告されており、わが国の小・中学生にも抑うつ症状を示す子どもたちが少なからず存在することが示されてきている。従って、子どもの抑うつやうつ病になるべく早い段階で気づいてあげることや、より適切な対応や支援は重要であると考えられる。そのためにも、まずは、子どもの抑うつやうつ病に影響する諸要因の特定や、その維持に関与している要因を探っていく必要があるだろう。

これまでの抑うつやうつ病の研究では、パーソナリティ、ソーシャル・サポート、親の養育態度などの心理社会的要因に焦点を当てた検討がなされてきている。加えて、昨今では、生物学的要因という視点から双生児を対象とした人間行動遺伝学的なアプローチにより、抑うつやうつ病の背後にある遺伝要因と環境要因の構造についても明らかにされてきている。そこで、本研究では、双生児法を援用して、児童・思春期の抑うつ傾向と心理社会的要因との関連に関する生物学的要因も含めた実証的検討を行い、子どもの精神保健にとって有意義な基礎的知見を提供することを目的として行われた。

II. 方 法

本研究は、双生児とその家族を調査協力者として 1999 年に開始された縦断研究（ツインプロジェクト縦断データ：菅原，木島，菅原，酒井，真榮城，詫摩，天羽）の一部を使用して行われた。本研究の調査対象者は、9~18 歳までの一卵性双生児 535 ペア（男子 236 ペア，女子 299 ペア），二卵性同性双生児 334 ペア（男子 150 ペア，女子 184 ペア），二卵性異性双生児 181 ペアであった。平均年齢は、13.5 歳（ $SD=2.5$ ）であった。

本研究では、1999~2007 年に隔年で行われた郵送式質問紙調査の中から、パーソナリティ測定尺度、ソーシャル・サポート尺度、親の養育態度尺度、抑うつ評価尺度により得られたデータを分析に使用した。

III. 結 果

児童・思春期の抑うつ傾向の背後にある遺伝要因と環境要因の構造における性差について検討し

た結果、性別特有の遺伝要因(A')や共有環境要因(C')は見出されず、男女で遺伝要因(A)と非共有環境要因(E：一人ひとりに独自の効果を及ぼす要因)の効果量は等しいが、共有環境要因(C：きょうだいを似させる働きを持つ要因)の効果量に違いがあることが示唆された。この結果から、抑うつ傾向に影響を及ぼす共有環境要因(C)に対する反応や受け止め方の大きさに対して、男女で異なることが明らかとなった (図 1)。

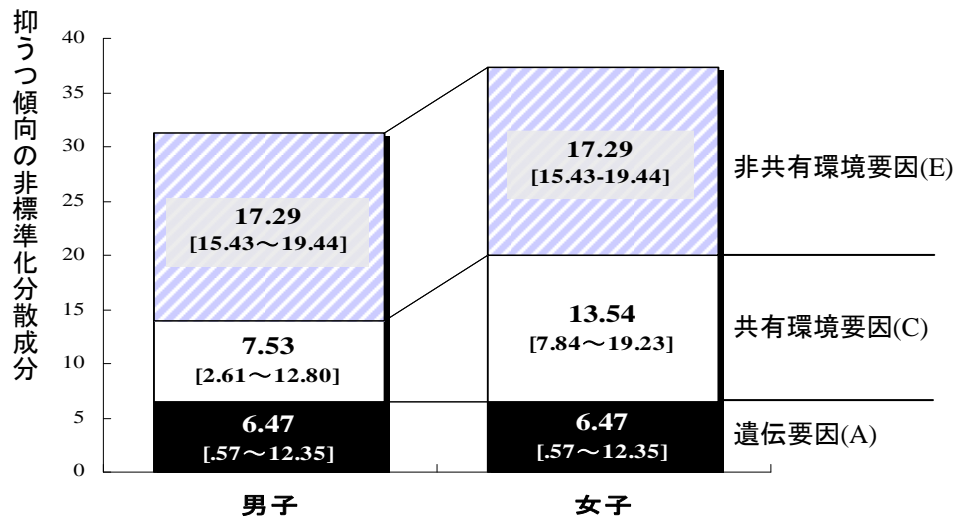


図 1 男女別の抑うつ傾向の非標準化分散成分, []内は 95%信頼区間

次に、児童・思春期の抑うつ傾向と関連の深いパーソナリティである「損害回避」と「報酬依存」を含めた多変量遺伝分析を行ったところ、成人を対象とした先行研究と同様に (Ono et al., 2002), 抑うつ傾向に独自の遺伝要因(A)の影響はなく、抑うつ傾向の遺伝要因は、抑うつ傾向と関連を持つパーソナリティの遺伝要因(A)に由来することが示唆された (図 2)。また、非共有環境要因(E)の独自性は高いことが示された。

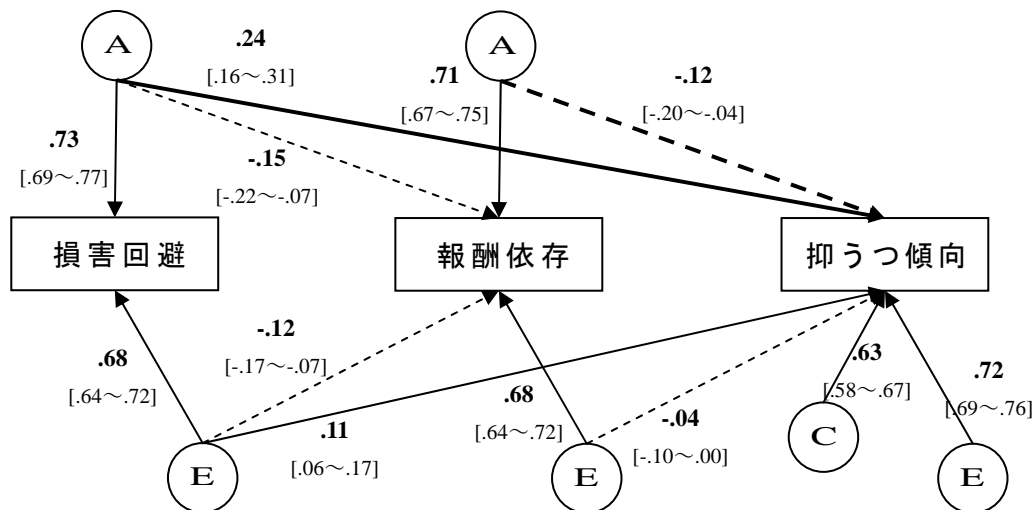


図 2 損害回避, 報酬依存, および抑うつ傾向のコレスキー分解による多変量遺伝分析の最適モデル (A : 遺伝要因, C : 共有環境要因, E : 非共有環境要因, []内は 95%信頼区間)

さて、これまでの先行研究によりソーシャル・サポートの欠如が抑うつ傾向を高めてしまうことが示されてきており (e.g., Rubin et al., 1992), 家族や友人などの身近な人々のサポートが抑うつ傾向の関連要因であることは既によく知られている。それでは、抑うつ傾向の背後にある遺伝や環境の効果は、ソーシャル・サポートによって何らかの影響を受けているのであろうか、という点について遺伝 - 環境交互作用の観点から検討を行った。その結果、母親および友人からのサポートが高まるにつれ、思春期の抑うつ傾向に寄与する遺伝の影響が小さくなることが示唆された (図 3, 4)。

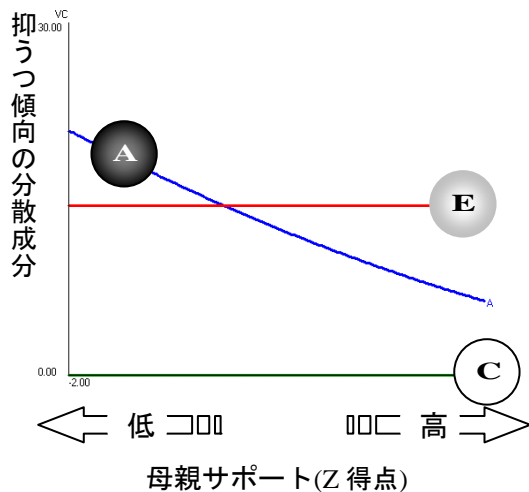


図 3 母親サポートレベルによる子どもの抑うつ傾向の ACE 分散成分の変化 (A: 遺伝分散, C: 共有環境分散, E: 非共有環境分散)

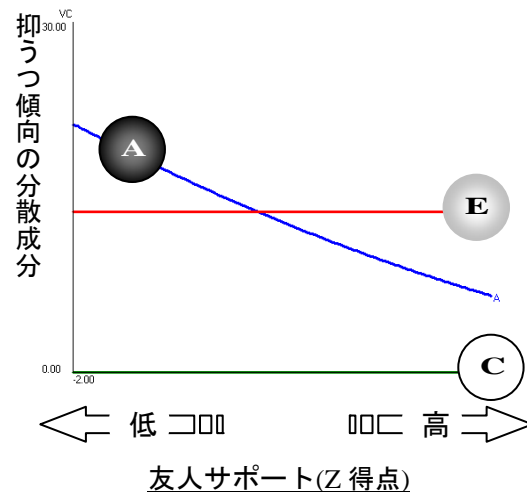


図 4 友人サポートレベルによる子どもの抑うつ傾向の ACE 分散成分の変化 (A: 遺伝分散, C: 共有環境分散, E: 非共有環境分散)

次に、心理社会的要因の一つとして家庭内における両親の養育態度を取り上げた。例えば、父親と母親が、「子どもに対して温かく接している」と思っている場合、実際に子どもは「あまり温かく接してもらえていない」と感じている場合、子どもの精神的健康にどのような違いが見られるのかについて検討するために、子どもと両親の養育の温かさに対する認知パターンと子どもの抑うつ傾向との関連について検討した。加えて、抑うつ傾向の高い子どもとそうでない子どもの相違に関連する要因について、より具体的に検討するために、一卵性双生児を対象に彼らの抑うつ傾向レベルに違いが見られた場合、どのような親の養育の温かさが関連を持っているのかについても検討を試みた。その結果、父母の養育の温かさ得点が高い場合でも子どもの得点が低いと、子どもの抑うつ傾向が他の群よりも高いことが示された (図 5, 6 ; ①子どもの得点が高く親の得点が低い群, ②子どもと親の得点がほぼ等しい群, ③子どもの得点が低く親の得点が高い群)。さらに、遺伝的にほぼ 100%一致している一卵性双生児を対象に検討した結果、子どもの遺伝的要因という生得的な要因を考慮した上でも、抑うつ傾向の高い群の方が、母親の養育の温かさに対する子どもの認知が低いレベルの状態にあることが示唆された (図 7)。

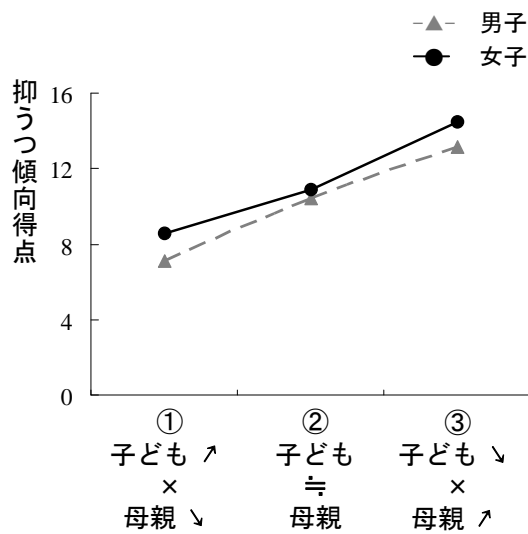


図 5 子どもと母親の養育の温かさに対する認知パターンと子どもの抑うつ傾向との関連

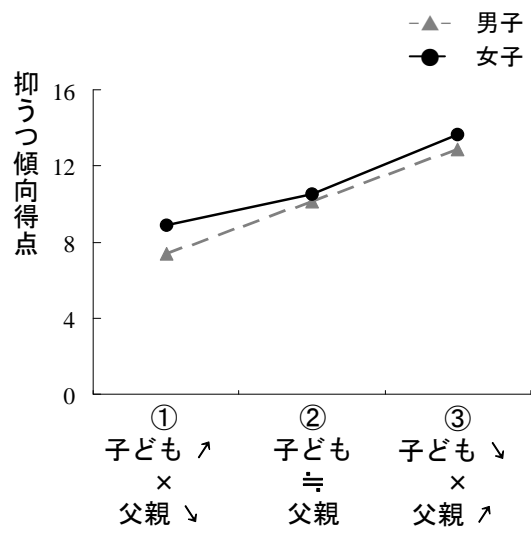


図 6 子どもと父親の養育の温かさに対する認知パターンと子どもの抑うつ傾向との関連

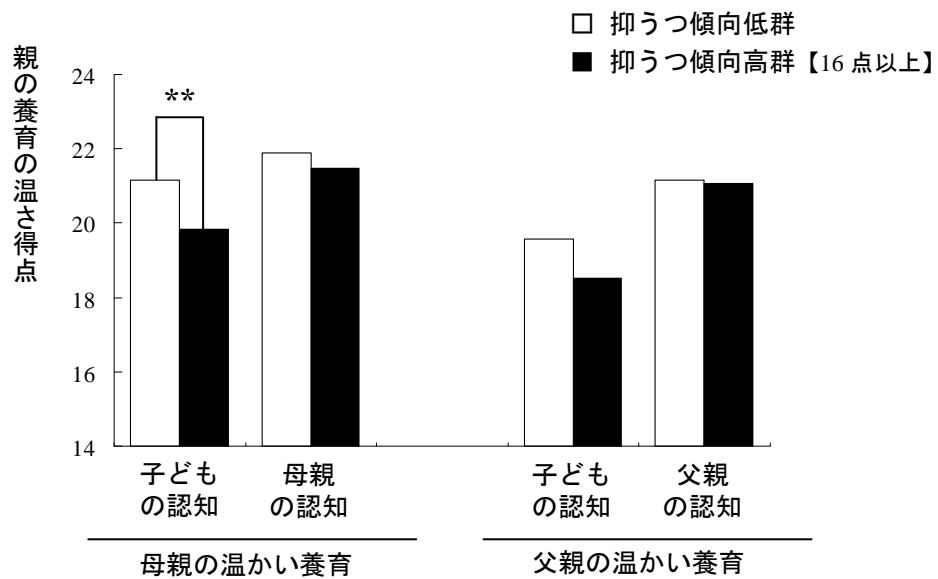


図 7 一卵性双生児ペアにおける親の養育の温かさと子どもの抑うつ傾向との関連 (双子の一方の抑うつ傾向得点が 16 点以上の一卵性双生児ペアによる検討, ** $p < .01$)

IV. 考 察

児童・思春期の抑うつ傾向にも生物学的要因である遺伝的要因が関わっていることは明らかである (図 1)。しかしながら、これまでの研究は、主に抑うつ傾向自体の遺伝的要因に焦点が当てられて展開されてきたが、本研究では、抑うつ傾向と心理社会的要因との関連にも遺伝的要因が絡んでいると

いう観点から検討を行ってきた。その結果、心理社会的要因として取り上げた、個人内要因であるパーソナリティの損害回避の高さ（過度の不安感や予期懸念の高さ、人見知りの激しさ、疲れやすさなどの特徴）や報酬依存の低さ（他人と打ち解けられない、人との付き合い下手などの特徴）の遺伝的要因が、児童・思春期の抑うつ傾向に影響を及ぼしていることが明らかとなった（図 2）。また、心理社会的要因である、母親や友人からのサポートの高さが、児童・思春期の抑うつ傾向の遺伝的な個人差の顕現化を小さくする効果があることも示された（図 3,4）。さらに、父子と母子間の養育の温かさに対する認知パターンと子どもの抑うつ傾向との関連について検討した結果、養育の温かさに対しての両親の得点が高くても子どもの得点が低いと、子どもの抑うつ傾向は高いレベルにあることが示唆された（図 5,6）。特に、母親の温かい養育に対する子どもの認知の低さは、子どもの持つ個人差に関わらず、抑うつ傾向の高さと関連を持つという結果も踏まえて（図 7）、親が「温かく接している」と思っていること以上に、子どもが「どのように受け止めているのか」に配慮した親子のコミュニケーションを図ることが重要であると考えられた。

（註. 研究会講演ならびに本稿の内容は、著者がお茶の水女子大学大学院人間文化研究科に提出した学位申請論文の一部である。）

引用文献

- 傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山司 (2004). 小・中学生の抑うつ状態に関する調査—Birlleson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) を用いて— 児童青年精神医学とその近接領域, **45**, 424-436.
- Harrington, R., Bredenkamp, D., Groothues, C., Rutter, M., Fudge, H., & Pickles, A. (1994). Adult outcomes of childhood and adolescent depression: III. Links with suicidal behaviors. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **35**, 1309-1319.
- Ono, Y., Ando, J., Onoda, N., Yoshimura, K., Momose, T., Hirano., & Kanda, S. (2002). Dimension of temperament as vulnerability factors in depression. *Molecular Psychiatry*, **7**, 948-953.
- Rubin, C., Rubenstein, J. L., Stechler, G., Heeren, T., Halton, A., Housman, D., & Kasten, L. (1992). Depressive affect in "normal" adolescents: relationship to life stress, family, and friends. *The American journal of orthopsychiatry*, **62**, 430-441.

日本双生児研究学会 第24回学術講演会のご案内（第2報）

日 時：2010年1月23日（土） 午前9時30分～午後5時

会 場：石川県立生涯学習センター（22号室）

〒920-0962 金沢市広坂2丁目1番1号 石川県広坂庁舎

TEL: 076-223-9571 FAX: 076-223-9585

参加費：2,000円（多胎児の保護者、多胎児サークル関係者は無料）

託 児：無料 午前（9:00-12:30）のみ行います

*** プログラム ***

9:00 受付開始

9:30 開会の挨拶 第24回大会会長 大木秀一（石川県立看護大学）

一般講演1 座長：服部律子（岐阜県立看護大学）

9:40～10:00 多胎育児支援全国普及事業について

田中輝子（多胎育児サポートネットワーク）、大木秀一（石川県立看護大学）、志村 恵（金沢大学）、服部律子（岐阜県立看護大学）、大岸弘子（ひょうご多胎ネット）、山中典夫（多胎育児サポートネットワーク）、橘 薫、玄田朋恵（いしかわ多胎ネット）、天羽千恵子（ひょうご多胎ネット）、糸井川誠子、田口章子（ぎふ多胎ネット）

10:00～10:20 多胎育児ピアサポート活動の課題・・・ピアサポーターの声から・・・

佐藤喜美子、太田ひろみ、佐々木裕子、山元有佳（杏林大学保健学部看護学科）

10:20～10:40 双子の母親の出産後3か月から1年6か月までの離乳の方法とその思い

藤井美穂子（日本赤十字看護大学）

（休憩）

一般講演2 座長：加藤憲司（国際医療福祉大学）

10:50～11:10 ふたごまるまるプロジェクト ～日常生活からふたごの行動発達を探る

野寄茉莉、藤澤啓子、安藤寿康（慶応義塾大学）

11:10～11:30 高齢双生児を対象としたIADL低下に關与するライフスタイル要因の研究

大野智代、西原玲子、早川和生（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

11:30～11:50 高齢双生児の社会的役割、手段的日常生活動作に關連する遺傳的要因についての研究

西原玲子（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）、乾富士夫（白鳳女子短期大学認定看護師教育センター）、加藤憲司（国際保健医療大学小田原保健医療学部）、富澤理恵、榎谷里紗、早川和生（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

11 : 50～12 : 10 双子幼児とその親の遊び場面における発話の音声・言語学的検討
岡田実緒 (大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻)、麦谷綾子、中谷智広、
石塚健太郎 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)、林知里 (千里金
蘭大学看護学部)、西原玲子、早川和生 (大阪大学大学院医学系研究科保健
学専攻)

12 : 10～13 : 30 昼食 (幹事会)

13 : 30～14 : 00 総会

シンポジウム 司会：志村 恵 (金沢大学)

14 : 00～15 : 00 「研究者と協力者のよりよい関係を考える」

シンポジスト：

安藤寿康 (慶応義塾大学)：

ToTCoP (首都圏ふたごプロジェクト) や他のインフォマントを利用した研究の経
験・立場から

加藤憲司 (国際医療福祉大学)：

諸外国における協力者と研究者の協力関係の実際、信頼関係の構築について
～スウェーデンでの事例を通じて～

杉浦祐子 (ツインマザーズクラブ)：

数多くの調査・研究に協力してきたツインマザーズクラブとして考えること

田中輝子 (多胎育児サポートネットワーク)：

当事者等が研究者を巻き込んできている地域及び全国ネットワークのあり方について
～セルフヘルプ・グループとして地域に果たす役割と、ネットワークの必要性～

(休憩)

一般講演 3 座長：野中浩一 (和光大学)

15 : 10～15 : 30 思春期の双生児における身体の発育・発達 (2)
福島昌子 (東京大学教育学部附属中等教育学校)

15 : 30～15 : 50 男女のふたごについて
天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)

15 : 50～16 : 10 多胎出産の現状 ―妊産婦の観点から―
齋藤令子 (ツインマザーズクラブ)

(休憩)

16 : 20～16 : 50 学会奨励賞受賞者講演 (受賞者なしの場合 16 : 20 閉会となります)

16 : 50～17 : 00 閉会の挨拶 次期大会会長 菅原ますみ (お茶の水女子大学)

17 : 15～18 : 00 交流会 (講演会場にて行います)

18 : 30～ 懇親会

*一般講演の発表は、全て口演と質疑をあわせて20分です。

【お問合せ先】

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1 石川県立看護大学 健康科学講座
(日本双生児研究学会第24回学術講演会大会事務局) 大木秀一
TEL&FAX: 076-281-8377 E-mail: sooki@ishikawa-nu.ac.jp

【託児のお知らせ】

託児時間は9:00~12:30です。事前申し込みが必要です。締切 2010年1月15日(金)

申し込み先: 子育て生活応援団 TEL&FAX: 076-260-5155 E-mail: info@kosodateo.com

「2010年1月23日学会託児申し込み」として、保護者のお名前・ご住所・電話番号、お子さまのお名前・性別・年齢・アレルギーの有無などをお知らせ下さい。

【交通のご案内】

JR 金沢駅から北陸鉄道バスに乗車、香林坊下車徒歩4分。石川県広坂庁舎(旧県庁舎)内
JR 金沢駅から車で約10分

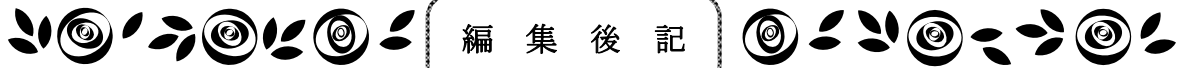
兼六園や金沢21世紀美術館、石川県立美術館の近くです。

注) 駐車スペースが限られておりますので、なるべく公共交通機関等をご利用ください。



メーリングリスト登録のお願い

日本双生児研究学会の会員のメーリングリストを整備して、急ぎの連絡を会員に流したり、会員同士の交流を活発化させたいと考えています。つきましては、次号のニュースレターにて、未だ学会会員のメーリングリスト（jsts@twins.gr.jp）に登録していない会員はできるだけ登録するように呼びかけの文面を掲載していただけると誠に幸いです。メーリングリストの担当は小野寺勉会員ですので、小野寺さんのメールアドレス（onodera@gapj.net）もしくは事務局（早川）にメールを送っていただければ登録できます。なにとぞ、宜しくお願い申し上げます。



編集後記

<編集後記>

みなさまお元気でご活躍のことと存じます。第24回学術講演会（大会長 大木秀一先生）のプログラムを掲載した『ニュースレター』をお届けします。再び金沢の地で開催します。この冬は比較的暖冬ということですので、どうぞご安心してお越してください。会場での活発な議論を宜しくお願い申し上げます。

また毎号のお願いで恐縮ですが、次号以降のため海外の学術雑誌へ投稿された場合、サマリー等をお寄せください。編集委員 志村恵（金沢大学）横山美江（大阪市立大学）

Dear Japanese friends and colleagues:

Come to Seoul next year!!! The International Congress on Twin Studies (ICTS; June 4 – 7, 2010) will be held at Grand Hyatt Hotel in Seoul in conjunction with the 40th Behavior Genetics Association (BGA) meeting (www.BGA.org; June 2-5, 2010). There will be a one day overlap (June 5, Sat) between the ICTS and the BGA meeting.

I am very proud of Japanese twin researchers as Japan has the longest history of twin studies among Asian countries. As some of you may remember, the ICTS was held first time in Asia in Tokyo in 1992. Since then the ICTS has been held mainly in European countries and the United States. The ICTS 2010 will be the second event in Asia following the 1992 Tokyo conference.

One of the most important missions of the ICTS 2010 is to promote twin studies in Asia and to expand opportunities for twin researchers throughout the world to meet each other. Especially, the 2010 conference will address recent quantitative and molecular genetic findings on human behaviors and complex diseases, obstetrical issues of multiple pregnancy epigenetic issues in twin studies, genotype-environment interactions in psychopathology and reproductive health, longitudinal studies of twins as well as advanced methodology of twin studies. Along with a special one-day pre-congress workshop contributed by internationally distinguished scholars and the BGA scientific program, the ICTS 2010 will provide unparalleled educational experiences and rare opportunities to catch up the latest developments of twin research. Please don't miss this opportunity!!!

We are doing our very best to make all these three events (the pre-congress workshop, the ICTS, and the BGA meeting) scientifically stimulating experiences, and inexpensive for most attendees by offering reasonable rates of the hotel accommodation and meeting registration fees. Especially, the pre-congress workshop will be free for anyone who registers for a minimum of single-day registration either for the BGA meeting or the ICTS. A discounted meeting registration fee will be offered to those who register for both BGA meeting and the ICTS.

For students, the Youth hostel will be available with room rates under 2500 Yen per night. The hotel room rates range approximately from 9200 to 9900 Yen per night for Lotte City Hotel, and 12000 Yen for Grand Hyatt hotel. For more details of the conferences, please visit www.icts2010.net and feel free to contact me at ythur@mokpo.ac.kr. I hope to see all of you in Seoul next year! Please pass along this information to your friends and colleagues!

Yoon-Mi Hur, PhD (ICTS2010 Local Host)